

テーマ④：「キャリア・デザイン」

1. 「キャリア・デザインとは」
2. 「無知を知る」
3. 「自分で考える」
4. 「全体を俯瞰（ふかん）する」
5. 「仕事なんて何だっていい」
6. 「就職先なんてどこだっていい」
7. 「やりたいことを捨ててみる」
8. 「仕事の適性なんて関係ない」
9. 「何のために生きているのか」
10. 「あなたにとって大切なものは何ですか」
11. 「自分の個性を大切にして」
12. 「自分の強みが分からない」
13. 「最低から始めるつもりで」
14. 「キャリアは偶然が支配する」
15. 「面接で蹴られても落ち込むな」
16. 「私自身のキャリアについて—①」
17. 「私自身のキャリアについて—②」
18. 「私自身のキャリアについて—③」
19. 「私自身のキャリアについて—④」
20. 「キャリアの先にある人生」
21. 「夢やビジョンより理想と志」
22. 「自分の人生を大切にして」
23. 「人生に正解なんてない」
24. 「だれかの役に立つこと」
25. 「自分に与えられた運命の中で」
26. 「戦略的にキャリアを考える」
27. 「常識とは違う行動をとる」
28. 「絞り込み突き抜ける」
29. 「先を読み自分で決める」
30. 「戦略に感性を持ち込む」
31. 「ゴールラインよりスタートライン」
32. 「精進」
33. 「覚悟を決めて突き抜けるまでやる」
34. 「成果をあげるための覚悟と人間力」
35. 「自分らしいキャリアに結果として近づく」
36. 「外ではなく内にある」

第1回

「キャリア・デザインとは」

今年の國さんコラムのテーマは「キャリア・デザイン」になった。3年前が「自分らしく生きる」、一昨年が「生きる力」、そして昨年が「人間力」だったから、今年はかなり趣向が変わったといえる。しかし、これまでも仕事を中心に書いてきたから、今年も同じテーマだともいえる。

「キャリア・デザイン」について書くにあたって、そもそも「キャリア」とは何なのかと思って辞書で調べてみた。本を読む時、言葉の定義からくどくどと始まるような本は好きではないのだが、実際問題、私は「キャリア」の正しい意味を知らない。辞書には「職歴」とか「経歴」と書いてあった。英英辞典で調べてみても”the series of jobs that…”と書いてあったので、やっぱりキャリアとは「一連の仕事の履歴」のようなものなのだろう。

ということは「キャリア・デザイン」は少々おかしな言葉のようにも思える。なぜなら、「キャリア」は「職歴」であり、それは職業を積み重ねた結果である。「デザイン」は「計画」とか「設計」という意味だから「キャリア・デザイン」とは職歴を計画するという意味になる。そもそも結果を計画などできるはずなのに……。私は、キャリアは計画出来ないと思っている。まあ、このことについてはおいおい話していくことにしよう。

このコラムは、これからどんな仕事に就こうかと考えている学生さん達と、仕事を始めてまだ年数の経ってない若者達を念頭に置いて書いていこうと思う。私はいま46歳だから、私自身が社会に出た頃に生まれた人達に向けて書くことになる。私には既にキャリアがある。しかし、これからの自分のキャリアのことを考えると全く白紙だといっていい。嘘いつわりなしに、5年後自分が何をやっているかなんて皆目見当がつかない。

そういう意味では、将来のキャリアという点において、僕の今の状態はこのコラムを読んでいる君達と一緒にいると思ってる。だから皆さんに何かを教えようという気持ちはない。一緒にキャリアについて考えていきたいと思う。

このコラムを書き始める前に、キャリアとは何かについて自分の考えを整理しておくべきだと思ったが、そんなことは出来なかった。過去の私のコラムでもそうであったように、私の考えは世の常識と少し違っている。だから、「こんな考えをする中年もいるんだな」くらいの軽い気持ちで読んでもらえたらと思う。では来週から始まり始まり。

以上

(文字数：992字)

第2回

「無知を知る」

キャリアについて書こうとすると、やはり一番気になるのはこれから就職活動を始めようとしている人達だ。それも、自分が何をやりたいかさえ分かってない人達。

僕は大学生のとき外国へ行きたくてしょうがなかった。その頃、オーストラリアと日本の中でワーキングホリデーという制度が作られた。これは観光ビザで旅行しながら現地で就労できるというもの。「これならお金の全くない僕でも海外に行ける。後は海外に行く旅費だけだ」と考え、貨物船に乗せてもらって海外へ行こうと思い立った。そして意を決して、現在の商船三井、その当時の大阪商船三井船舶の虎ノ門にある本社受付に行き、「貨物船に乗せてもらいたいのですが」と唐突にお願いした。玄関を入るとき足が震えていたのを今でも覚えている。

しばらく待たされ、通されたのは最上階の相談役の部屋だった。だだっ広い部屋の中で相談役はゴルフの素振りをしていた。彼は私に席を勧めて、おもむろに言った。「君はこの宇宙の森羅万象の中の何%を知っていると思うかね。」僕は「1%くらいでしょうか」と答えた。彼の私へのアドバイスは「君はまだ世の中のことを何も知らない。貨物船に乗れるのは船員組合に加入している人だけだ。そんな世の中のことを何も知らない人間が、海外へ行く事だけに夢中になるのではなく、しっかり勉強し、もっといろんな経験を積みなさい」ということだった。僕は妙に納得してサーッと海外への情熱が冷めていった。

僕が皆さんに伝えたいことは、これから就職活動を始めようとしている皆さんはまだ世の中について何も知らないということ。どんな仕事があるのか、仕事とはそもそも何をすることなのか、そしてその仕事に就くためにどんな就職活動をしたらいいのか、何もかも全く知らないのだ。

まずは自分が何も知らないことを認識し、行動を起こすことが大切なのではないかと思う。それも、インターネットで無機質な情報を収集するという行動ではなく、人と会って生きた情報を自分の目と耳で掴んでもらいたいと思う。その気になりさえすれば、君の周りには就職部もあれば、そうこのサイトを運営しているパフもある（僕はパフの宣伝マンではないが）。

就職を控えている人に最初に伝えたいことは、「早く具体的な行動を起こしてもらいたい」ということだ。先輩達の後悔の弁で一番多いのは「もっと早く行動すべきだった」という言葉なのだ。

以上

(文字数：984字)

第3回

「自分で考える」

前回のコラムで、これから就職活動を行う上で大切なことは「具体的な行動を起こすことだ」と書いた。でも、皆さんにとっては「では、何から始めたらいいのだろうか？」という感じだと思う。

自分で何をやればいいのか分からない時は、まわりの人のアドバイスを素直に聞いてみよう。皆さんが仕事をするようになってからも「素直」ということはとても大切だ。素直な人は、周りの人から好かれるし可愛がられる。

しかし、もっと大切なのは「自分で考える」ということだ。これから皆さんがどのように就職活動をし、どのような会社を選んでいくかということは、今まさに僕がこれからどのように毎週のコラムを書き、最終回までの全36回のコラムを、全体的にどんなものにするかを決めていくことに似ていると思う。どちらも先が全く見えていないからだ。

何かを書こうとすれば、その分野のことを研究し、専門家の意見や考え方をまとめ、それに自分の考え方を加えるようにして書いていくのが一般的かもしれない。ひょっとしたら、僕も「キャリア・デザイン」に関する本を読むかもしれない。何事でも研究し、勉強することは大切だ。

しかし、注意してもらいたいのは、もし僕が何も考えずに、ただ他人のアドバイスに従って書き、「キャリア・デザイン」の専門家といわれる人達の意見を集めたような内容のコラムを書いたのでは、人に興味は持ってもらえないということだ。

就職活動も同じだと思う。人の意見やアドバイスを素直に聞くのはいいが、大切なのは自分で考えることだ。正しい会社の選び方などなく、正しい就職活動のやり方もないのだ。100人いれば100通りの会社の選び方や就職活動のしかたがあつていいのだ。

そして、自分で考えると他人とは違った行動になるのが普通だ。それがいいのだ。社会に出たら答えのない問題ばかりを取り扱わなければならない。その時、自分で考えらえる人か、答が与えられるのを待つ人かはとても大きな差になる。

これからの皆さんの就職活動のやり方が、周りの人と同じような、自己分析をし、業界研究をし、結局は自分独自の考えもなく「人気企業に決めました」では、面接官からすれば、「顔のないノッペラボー」のように見えてしまう。それに引き換え、自分で考えられる人の話は面白いし心に響く。

人の話を素直に聞くと同時に、常に「自分で考える」ということを意識してもらいたいと思う。

以上

(文字数：982字)

第4回

「全体を俯瞰（ふかん）する」

前回のコラムでは自分で考えることの大切さについて書いた。でも、皆さんの中には「何をどう考えていいのかわからない」という人も多いと思う。僕は、就職活動は仕事と同じだと思っている。どちらも、計画を立てて、実行し、途中で悪い所や間違った所を修正しながら目標に近づけていく。

では、就職活動の第一歩は何から始めればよいか。それは就職活動全体を俯瞰（ふかん）することだ。仕事をする時でも勉強する時でも同じだが、先ず全体像を把握してから始めることが大切だ。全体像さえつかめれば、あせったり不安になったりすることもないし、自分が何をやらなければならないかも明確になる。

仕事ができる人かどうかは、1時間ほどの試験を受けてもらえればだいたい分かる。仕事ができる人は、先ず問題全体を眺める。その試験がどのような問題で構成されていて、どんな種類があり、どこに難しそうな問題があるか、そんな全体像をつかもうとする。全体が見えれば、何から手をつければよいか、1時間という時間をどのように配分すればよいか分かる。

就職も同じだ。では、これから始まる就職活動の全体像を見てみよう。取り敢えず、「内定をもらう」ことが就職活動の一つの目標だとすれば、来年の4月頃に内定をもらうことが最終ターゲットだ。最終目標を起点にして、おおよその就職活動を分解してみると次のようになる。

<u>代表月（ちらばり）</u>	<u>行 動</u>
4月（3月～5月）：	内定をもらう
3月（2月～4月）：	何社かの面接を受けている
2月（1月～3月）：	会社説明会に参加している
1月（12月～2月）：	エントリーシート（会社毎に形式が違う応募用紙）を書いている
12月（11月～1月）：	応募する会社・業界を選択している
11月（10月～12月）：	何をやりたいか、どのように会社を選べばいいか考えている

だから、今皆さんがやらなければならないことは、「自分が何をやりたいか、どのように会社を選べばいいか」を考えることだ。今は、「内定をもらえるだろうか」とか「面接では何を聞かれるのだろうか」とかといった不安もあるだろう。しかし、そんな心配は先になってからすればいいのだ。キリスト様も「明日のことは明日自らが思い悩む」と言っておられる。

では次週から「やりたいことも見つからないのに、どうやって会社を選べばいいんだろう？」と思っている人達へのメッセージを送る。

以上

（文字数：975字）

第5回

「仕事なんて何だっていい」

仕事選びをしようとしている人に先ず伝えておきたいことがある。それは、「仕事なんて何だっていい」ということだ。ずいぶん乱暴ないい方のように聞こえるかもしれないが、僕が社会人になってから約25年間にやってきた様々な仕事を通しての、いま現在の偽らざる気持ちだ。

僕は大学時代、機械工学を勉強しエンジニアとして社会人のスタートをきった。最初の仕事は海外に製鉄所を作りに行く仕事。それを5年ほどやってから同じ会社の人事部に移り、その後企画に移った。事業分野もプラント建設事業、鉄鋼事業、建設機械事業、そして本社部門と転々とした。7年前に会社を辞めてからは経営コンサルタント、研修講師を仕事としている。経営コンサルタントとしての客先も、飲食業、印刷業、食品加工業、サービス業、建設業と様々だ。そして、最近では執筆業も私の重要な仕事になっている。

いままで、新しい仕事に就く時はいつも苦しんだ。しかし、それらを何とかこなしてきて思うことは、「仕事なんてどれも同じ」ということ。もちろん、仕事が変われば仕事の内容も違うしやり方も違う。しかし、「全ての仕事は人を通して行なわれる」という点と「全ての仕事は課題解決である」という点では皆同じなのだ。少なくとも僕はそう思っている。

また、仕事をしていてどんな時に幸せを感じるかと聞くと、「だれかの役に立っている」とか「新しいものを独自に作り出した」とかという答えが返ってくるのが断然多い。こんな幸せ感はどうな仕事を通してでも得られる。特別な仕事をしないと幸せになれないなんてことはない。業種や業界を選ぶ時、自分の向き不向きなんてあまり考える必要はない。なぜなら、仕事の本質はどれも同じだからだ。

更にいえば、20歳代は所詮修行の時でしかない。僕の経験からいえば、やりたくない仕事をやっている時に人間が一番成長する。また、人生の成功の種が生まれるのも、実は嫌な仕事をしている時だ。

いま現在やりたいことが明確な人は、そのやりたいことを大切にしたらいいと思う。しかし、やりたいことが見つからない人は、そのことであまり悩み苦しむ必要はない。就職先なんてもっと気軽に決めればいいのだ。

「有名な会社に入りたい」とか「給料の高い会社に入りたい」とかと思わなければ、拾ってくれる会社はいくらでもある。その与えられた環境の中で修行すればいい。それこそが幸せになれる一番の近道だと思う。

以上

(文字数：994字)

第6回

「就職先なんてどこだっていい」

先週「仕事なんて何だっていい」と書いた。日本政策投資銀行の業種分類によれば、中分類だけで28業種ある。食料品、繊維、化学工業、電気機械、輸送用機械、水産業、建設業、小売業、不動産業、サービス業などと延々と続く。こんな中から自分にあった業界を選ぶなどとうてい不可能だと思う。

更にいえば、皆さんは仕事をやったこともない。いくら業界研究をし、先輩の話聞いても、結局仕事はそれを自分でやってみなければ本当の所は分からない。だれも、どの仕事を選ぶかはひょんなきっかけからだ。親や親戚がその仕事に携わっていたとか、会社訪問で会った人事の人が素敵だったとか、何となく昔から興味があったとか、結局はそんなたわいもないことで就職先を選んでいるというのが実態だろう。

だから皆さんも、「就職先は直感で選ぶ」くらいの鷹揚さを持って就職活動に臨めばいいと思う。実は皆さんの直感の中には、意識に上っていない膨大な無意識の情報が眠っている。その中には皆さんの経験や価値観が詰まっている。あまり分析に頼らず、皆さんの直感を大切にしたらいいと思う。

今回もう一つ皆さんに伝えたいことは「就職先なんてどこだっていい」ということだ。僕は本当にそう思っている。皆さんの本音は、「大手企業か人気企業で、それも給料が高いところ」といった感じではないかと思う。当然、そう思っていてあたりまえだろう。僕も学生時代はそう思っていた。

前回のコラムで人が幸せを感じるポイントとして「貢献」と「創造」ということを書いた。僕が大企業から自営業に移って一番感じたことは、大企業にいた頃は自分がどのように社会や会社に役立っていたのか良く分かっていなかったということ。そして実際に僕がいなくなっても大企業は何の変化もなかった。当然だ。だが、いまは自分が人の役に立っていると実感できるし、新しいものを創造している。生きているという実感がある。

歴史を振り返れば、どの時代にも優秀な人達はその時代の人気企業に就職した。それは石炭産業であり繊維産業であった。そしてそれらの業種は、その人達が退職する頃には不況業種になっていた。昔一番安定しているといわれたのは公務員だった。しかし、いま一番将来のリスクが高いのは公務員だろう。

組織の将来なんてだれにも分からないし、人間の幸、不幸もどうなるか分からない。少なくともそれは、所属する組織によるものではないような気がする。

以上

(文字数：996字)

第7回

「やりたいことを捨ててみる」

前回、前々回と「仕事なんて何だっていい」、「就職先なんてどこだっていい」と書いた。就職活動を始める上での大前提は、そのくらいの気持ちでいいと思う。人気企業や大手企業に入りたいという欲望や、そこに入れば幸せになれるという幻想が、人を迷わせるのだと思う。

また、就職活動を始めるに際して多くの人が「やりたい事を見つけなさい」という。これは一理あることで、企業訪問をした際にも「どうして我社を志望したのですか」と必ず聞かれる。その答えが「ただ何となく」では迫力がない。「御社のこの仕事がしたいと思い志望しました！」と前のめりになって言われると、会社の人も熱意を感じたりする。何度も言うが、やりたいことが明確になっている人はそれを大切にすればいい。ただ問題なのは、この「やりたいこと」がなかなか見つからないことなのだ。

そんな人には、先ずこの「やりたいこと探し」を捨ててみることを勧める。僕は39歳で会社勤めを辞めて独立した。最初に始めた事業には失敗し食えなくなって、自分では一番やりたくなかった「経営コンサルタント」と「研修講師」の仕事をするようになった。何年もの間、悶々としながら仕事をしていた。毎日一人になると「俺は何をやってんだろう」という気持ちだった。

しかし、これが良かった。何が良かったかという、自分の「やりたいこと」を捨てられたからだ。「我」が無くなったということかもしれない。前々回のコラムで書いたが、多くの人が幸せを感じるのは、「人の役に立っている」と思える時だ。僕は経営コンサルタントとして、自分のことは横に置いて、顧問先の社長さんのことばかり考えていた。研修をしている時は、「受講生の皆さんに何か役に立とう」そんなことばかりを考えていた。

こうして、自分の「やりたいこと」を捨てて、目の前の人の役に立つことだけを考えると、次第に成果も出てくるし、人に喜ばれるようになる。仕事の楽しさや喜びはこうやって生まれてくるのではないかと思う。

「やりたいこと」なんて捨ててしまって、ただ巡り合ったご縁と環境の中で「人の役に立つこと」と「自分の高めること」だけを考えていればいい。しばらくは辛い日々が続くかもしれないが、きっとその辛抱がいつか報われる。そして、その時にこそ自分の「やりたこと」見えてくるのだと思う。「やりたいこと探し」なんか捨ててしまえばいい。

以上

(文字数：981字)

第8回

「仕事の適性なんて関係ない」

いま僕は、僕自身が開発した会計研修の講師を探している。講師候補を選ぶ時、講師経験があっても「僕は講師業が好きです」と言う人には仕事をお願いしないことにしている。

いろんな苦難を乗り越えてきて「やっぱり自分の仕事が好きだ」としみじみ言える人は本当に素敵だと思うが、軽々しく「自分の仕事が好きだ」という人は、思い込みが激しく、ひとりよがり視野が狭く、仕事に対して中途半端な人が多いような気がする。たぶん、自分中心に「楽しいか楽しくないか」だけで物事を判断して、少し苦しくなったり嫌なことが出てきたりすると簡単に逃げ出してしまおうし、自分から厳しい所に突っ込んでいかないうから、そうなるのではないかと思う。

また、一般的に認識されている仕事に向くタイプと、本当にその職種で成果を出している人のタイプには大きな差がある場合が少なくない。「私は人当たりがいいので、就職先として旅行代理店を目指してます」なんてことを言う人がいるが、顧客が本当に旅行代理店に期待していることは、愛想のよさなどより、仕事の正確さや情報の豊富さである。仕事の適性に関するつまらない思い込みや常識は捨てたほうがいい。

何度も言うが、世の中にある仕事の本質はどれも同じだ。このメルマガを主催しているパフの営業の仕事と僕のコンサルの仕事のどこに違いがあるだろうか。どちらも、お客様との信頼関係を作り、お客様の問題を深く理解し、その問題を解決する適切な提案ができるかどうかの基本である。何も違いはない。

仕事をする上では、好きか嫌いかより、顧客の期待と自分の責任を深く認識していることのほうが大切だし、適性があるかどうかより、その仕事をやり抜く覚悟があるかどうかの方が成果に与える影響は大きい。

更に言えば、適性に拘って若い時から一つのことしかできない人は年をとってから使いものにならない場合が多い。一つのこと以上のことができるから優位性も出てくるのだ。実際、経理知識のある営業マンは仕事ができる。

自分の不得意分野を磨くことは若い時にしかできない。長い人生の中で、人は無意識のうちに自分の好きな方向、自分に向いている方向に進んでいくものだ。だから、仕事はいつか自分の適性のある所に落ち着いていく。

若い時から自分の適性など考える必要はない。むしろ、若いうちにこそ適性のない仕事をやっておくべだと思う。適性があるかないかなんて仕事選びに関係ない。

以上

(文字数：994字)

第9回

「何のために生きているのか」

この4回ほど「仕事なんて何だっていい」、「就職先なんてどこだっていい」、「やりたいことなんか捨ててしまえ」、「仕事の適性なんて関係ない」と少し乱暴なことを書いてきた。それでなくても初めての就職活動に直面して不安になっている人を更に混乱させてしまったかもしれない。

しかし、少しは共感してくれた人もいたのではないだろうか。もちろん、僕の言うことが正しいわけではないが、僕の意見に共感してくれた人は、いかに世間の常識がまやかしで、そしてそのまやかしの常識にただ従っているだけで、自分の頭で考えていない大人がいかに多いかということにも気づいてくれたのではないかと思う。

就職活動は先ず「仕事も就職先もどこだっていいし、やりたことも適性もどうだっていい」くらいの大前提から始めればいいと思っている。そして、こういう前提に立てば、就職活動は結局自分で考えるしかないことが分かってくるだろう。正しい就職活動のやり方もなければ、正しい生き方もないのだ。

では、何をたよりに就職先を決めていけばいいのだろうか。ここで「後は自分で考えなさい」と突き放すのもいいのだが、少し僕自身のことを話してみようと思う。僕の大学時代の就職活動は、いまやりたいことが見つからない人には参考にならない。なぜなら僕は大学時代、やってみたいことがいくつもあったからだ。いま就職活動に悩んでいる人に参考になるとしたら、僕が39歳でサラリーマンを辞めた時のことだろう。

僕はその時、将来のビジョンもなければやりたいこともなかった。会社を辞めてから何をやるかを考えた。会社を辞めた時、僕の職業人生は将来に向かって360度開いた感じだった。なぜなら、それから何を職業として選んでもよかったから。そういう意味ではいまの皆さんの状況と同じだ。

僕が先ず考えたことは、「そもそも僕は何のために生きているんだろう」ということだった。僕は無宗教で、来世があるなどとは考えていない。哲学者でいうと、ニーチェの「神は死んだ」という考え方が好きだ。もともと意味のない人生に意味づけをしたり、現世になかなか希望を持ちにくい人を救うために宗教は本当に偉大だと思う。しかし、安易に来世を信じるから、現世を簡単に諦めたり現世での可能性を狭めたりするという危険性もある。

「この一度しかない人生を、そもそも僕は何のために生きているんだろう。」これが僕の就職活動の最初の質問だった。

以上

(文字数：997字)

第10回

「あなたにとって大切なものは何ですか」

「そもそも僕は何のために生きているんだろう。」会社を辞めてから僕はそんなことばかり考えていた。どうやったら自分のやりたいこと、自分の好きなことが見つかるのかと、「人生」「生きがい」「やりがい」そんなテーマの本を読み漁った。どれも参考になる所はあったが、僕の質問に答えてくれた本は一冊もなかった。

生きる目的についていつも考えていた僕は、当時小学校3年生だった息子に聞いてみた。

私：「健太郎、生きるってどういうことかな？」

息子：『『楽しい』ってことじゃない。だって人間は楽しむために生まれてきたんでしょ？』

私：「そんなことだれが言ってた？」

息子：「僕」

私：「・・・」（子供のほうがよく分かってる）

ハイデガーは宗教の救済の物語を「まやかし」とまで言う哲学者だ。死んだらもう自分はなくなってしまうということ直視することによって、逆説的に「いまをどう生きるか」が人間にとってより切実になってくると言うのだ。ニーチェは、自分の人生を肯定できるかどうか、つまり自分の人生を意味あるものと思えるかどうかは、自分の人生に納得できるか否かであると言う。僕の人生観は、このハイデガーやニーチェの考え方に近い。

ほとんどの人は自分の人生を肯定する。そうしないとやっていけない。であれば、どのような人生を送っても、人はだれも自分の人生に「納得」するのだろうか。もし、僕が不本意な人生を送ったとしたらどうだろう。そうだとすると、僕は自分の人生を肯定するのだろうか。分からない。

しかし、そのような場合の肯定は、自分で納得するのではなく、自分を納得させるのだと思う。ある部分自分をごまかすのだろう。僕は自分を納得させるのではなく、自分で納得できる人生を送りたいと思った。「やるだけのことはやった。思い通りにならなかったことも多いけど、本当に充実した楽しい人生だった。」そう思えるような人生を送りたいと思った。

そして、僕という人間の考えで判断して創り上げた人生こそが、僕という人間でしか生きられない、かけがえない僕の人生になるのだと思った。

そう考えてみると、生きていく上で大切なことは、「自分で考えること」と「自分は何を大切にしているのかを知ること」の2つのような気がする。つまり、人の真似事をしたり、人と比較したりするのではなく、自分自身が何に価値を置き、何をすれば幸福と感ずるのかを知ることが大切だと思うのだ。

以上

(文字数：991字)

第 11 回

「自分の個性を大切にしてい」

明けましておめでとうございます。就職を控えている人にとって今年は勝負の年だ。いま就職活動をしている人はそろそろエントリーシートを書く頃だろう。エントリーシートを書くためには先ずどの会社を志望するかを決めなければならない。そのために自己分析をしないさいといわれるのだろう。

しかし、自己分析で自分の適性を知ろうとか、過去を振り返って自分がなぜ高校時代に〇〇部に入ったかをつきとめるようとかする必要はない。そんな事はどうだっていい。また、自分の性格や特徴が形作られたのは何が影響したのか等の分析も必要ない。当然、親や育った環境が影響しているのだ。

この限られた時間の中で皆さんが知らなければならないのは、いま現在の皆さんの価値観だけだ。価値観は変わってきただろうし、これからも変わっていく。だから過去も未来も関係ない。「いま、ここで」が大切なのだ。なぜなら、皆さんがどの会社を選ぶかは、いま現在の皆さんの価値観によって決めることなのだから。

いまあなたは何に興味を持ち、どんな時楽しいと感じ、何を素敵だと思い、何を大切にしているのだろう。都会でヒルズ族と呼ばれるような刺激的な人生を望むのか、それとも田舎で自然に囲まれたノンビリした生活を望むのか。ビジネスの世界で自分がどこまで通用するのか試してみたいのか、それともボランティア団体で本当は社会のためになることをしたいのか。正しい人生なんてないのだ。それこそ、どんな人生を選んでもいいのだ。

ビジネスの分野に進もうと決めても、選ぶべき事はたくさんある。衣食住のどの分野に興味があるのか。大きなお金を動かすような仕事がしたいのか、ものづくりに興味があるのか。人に係る仕事がいいのか、一人でコツコツやる仕事がいいのか。そもそもそんな、職種や業種によって会社を選ぶような就職活動ではなく、実際会った人の印象で会社を選ぶことにするのか。それも一つの就職活動のあり方だ。「金持ちになりたい」と思うならそれもいい。世の中のすべての人が「人の役に立ちたい」と思うような社会だったらキモチ悪い。

何にワクワクし、何が大切と思うのか。当然それは人と違う。違っていいのだ。どんな価値観を持っているかの理由付けなどいらない。分析などするより、感じるままでいい。人と違うように感じる、そのことこそが皆さんの個性なのだ。その直感と個性を大切にしてい、自分に正直に生きればいいと思うのだ。

以上

(文字数 : 997 字)

第12回

「自分の強みが分からない」

就職をあまり難しく考える必要はないと何度も書いてきた。「就職先なんて所詮どこでもいい」くらいの余裕を持って臨めばいいのだ。「塞翁が馬」という言葉がある。人間の幸不幸は転々として予測できないという意味の言葉だ。就職に失敗して有名企業に行けなかったから、小さな会社で囑望されて大きな成功を収める人がいる。希望する会社に入れても、予想もしなかった地方勤務を命じられることがある。何がいいかなど分からないのだ。だから、あまり肩に力をいれずに就職先は選べばいい。

どんな会社を希望するかが決まったら次はエントリーシートと面接だ。そこでは必ずといっていいほど、志望の動機と自己アピールを書かされることになる。志望の動機は今まで書いてきたように皆さんの心に感じたことをそのまま書けばいいのだが、自己アピールが書けない。考えれば考えるほど、だれにもまけない自分の強みなど見つからないのだ。

しかし、ほとんどの人がそうなのだ。僕は40歳で独立した時、「これからは一人で生きていくのだから、自分の強みで勝負しなければならない」と思い、結構時間をかけて自分の強みを分析してみた。しかし、自分の強みなど何一つ出てこなかった。

自分で自分の強みを整理することは難しい。自分に出来ることは、せいぜい、今まで何を考え、何をしてきたかという自分の過去を語ることぐらいだろう。

面接で「私は何でも興味を持っていていろんな事に挑戦する性格ですが、一度始めると簡単に諦めない人間です。」などと、準備してきた自分の特徴や強みを説明する人がいるが、そんな話を面接官は聞いていない。なぜなら、それは自分で思い込んでいる、それもかなり美化した自分の姿でしかないからだ。

そんな主観的かつ抽象的なことを言うより、淡々と過去の事実を語ってもらいたいと面接官は思うものだ。皆さんが心配しなくても、その話の内容や話し方の中からあなたの性格や特徴を面接官がちゃんと見抜いてくれるのだ。

自分の強みや特徴を整理しておくなら、自分一人であれこれと考えるより、昔から仲が良かった友達や親に聞いてみればいい。他人の方がはるかにあなたのことを冷静に見ていて、思ってもいなかったあなたの長所を教えてくれるだろう。また、自分の両親の長所と短所を列記してみるとよい。これは結構客観的にできる。そして、それがそのままあなた自身の長所と短所になっているはずだ。

以上

(文字数：987字)

第13回

「最低から始めるつもりで」

いま就職活動をしている人のなかには、不安と焦りで押しつぶされそうになっている人も多いのではないかと思います。「エントリーシートがうまく書けない」「自己PRができない」「面接でうまく答えられるだろうか」「どうすれば選考に通るのだろうか」などなど。

これらの不安や焦りから逃れる一つの方法は、就職課の方や就職アドバイザーの方の指導に従って、しっかり準備しておくことだろう。不安になるのは、「自分は出来ないかもしれない」「自分はダメかもしれない」という自分の有能感が失われるからなのだ。

不安や焦りを取り払うもう一つの方法は、自分が考える最低の所から社会人人生をスタートする覚悟をすることだと思う。「自分をうまくPRしたい」とか「有名企業に入りたい」と思うから、不安になったり焦ったりするのだ。

就職活動に失敗して希望する会社に入れず、不本意な会社に入社することになってもいいと思えばよい。「そんなのイヤだ」と思うかもしれないが、いままで何度も言ってきたように、就職は何が成功で何が失敗かよく分からない。若い皆さんは、給料が高くて、教育制度がしっかりしていて、安定している会社がいいと思っているかもしれないが、人間は満たされた環境に居るとドンドン腐っていく。

いま安定している会社に入ったからといって、皆さんの人生が生涯安定するとは限らない。企業の浮き沈みのサイクルはどんどん短くなっている。いま現在の優良企業の多くはたぶん30年後には衰退企業になっていることだろう。

安定した人生を送るには、自分自身がどこに行っても高い収入を得られるような力を、自分自身で身につけるのが一番だ。企業の充実した教育制度がそれを可能にしてくれるのではない。厳しい環境におかれたハングリー精神がそれを可能にするのだと思う。

皆さんの先輩達で超氷河期に卒業した人達は、人生に対してしっかりした考えを持ち、社会人になってもよく勉強している人が多い。彼らはきっと将来自分自身の力を高め、どこでも生きていける安定した人生を送る人達になるだろう。

そう考えれば就職活動は失敗してもいいのだ。失敗が実は成功かもしれない。就職活動に失敗してもいい覚悟があれば、不安になることも焦ることもない。

そのようなどっしりした気持で就職活動に臨めば、就職活動は仕事や会社に対する視野を広めてくれるワクワクしたものと思えるようになるだろう。

以上

(文字数：985字)

第14回

「キャリアは偶然が支配する」

今まさに就職活動が花盛りだ。新聞を見ても企業説明会の広告が大々的に掲載されている。こんなにたくさんの会社があるのだから、就職活動中の皆さんは、この膨大な数の会社の中からどの会社を選べばいいか迷っていることだろう。

皆さんの多くは企業の財務諸表を分析できないだろうから、企業の財務的な状況もよく分からない。もし、それが分かったとしてもそれさえ就職先選びの判断基準にはならない。あまりに業績のいい企業は、従業員が働かされ過ぎていたり、逆に商品が強すぎて外との競争がなく、その持て余したエネルギーが内部の昇進競争に向かい、人間関係がギスギスしていたりする。

限られた時間の中で、乏しい自分の知識と経験だけをベースに会社をしぼり込んでいかなければならない。職種、業種、勤務地、規模、雰囲気などからしぼり込んでいくしかないだろう。しかし、情報量が多すぎるし、絞り込む選択基準も多すぎるので、論理的にベストな志望先を絞り込むことなど不可能だ。やはり、最後は直感でしかないのではないかと思う。

私が神戸製鋼所という会社を就職先に選んだのは、当時対応してくれたIさんという人事採用担当者の印象がとても良かったからだ。僕が大学生の頃は、4年生になってから就職活動が始めるのが一般的だったけど、僕は3年生の夏休みに一人でいくつもの企業を訪問した。ほとんどの企業が「まだ3年生だね。また来年きてね」と言うのだが、神戸製鋼所の人事の人だけが本当にじっくり僕の話聞いてくれた。その印象が強くて最終的に神戸製鋼所に決めたのだ。

その後何年かって、僕自身その神戸製鋼所の人事部に異動になった。そこには当時のIさんのことを良く知っている女性がおおり、「Iさんはね～、人の話を全く聞いてないんだけど、聞いているフリをするのがスゴクうまい人だったね～」と言うのだ。僕としては「えっ？ そうなんだ～」という感じだった。僕はそんなことで就職先を決めてしまったのかと。

最終的に就職先が決まるのはそんな誤解によるものかもしれない。結婚もそういう面がある。「結婚はお互いの誤解によって生じる」と言った人がいる。かなりの名言だと思う。人生とはそんなものかもしれない。キャリア形成の8割は偶然が支配するという研究結果がある。まさにその通りだろう。あまり深刻に悩まず、この誤解と偶然が支配する人生を楽しむつもりで就職活動をしたらいいと思う。

以上

(文字数：991字)

第15回

「面接で蹴られても落ち込むな」

今年私が担当するコラムのテーマは「キャリア・デザイン」だが、いままでは就職活動に特化して書いてきた。このコラムを提供しているパフという会社が就職と採用を支援する会社なので、キャリアについて書く上で就職のことをほったらかしにはできないと思ったのだ。だが、次回のコラム以降は、そろそろ就職だけでなくキャリア全般について書いていこうと思っている。

今回は就職に関する最後のコラムになるが、就職活動をしている人達に最後にどうしても伝えておきたいことがある。それは「面接で蹴られても落ち込むな」ということだ。いままで就職活動をしている学生さんを見ていて、採用面接で不合格になってひどく落ち込む人がたくさんいた。確かに不合格になればだれでも落ち込む。そこまでは普通なのだが、何か全人格的に否定されたようなひどい落ち込みかたをする人が多いのだ。

学生の多くがいままで経験してきている挫折は、入学試験に落ちたとか試合に負けたとかの挫折であり、そのようなことでは人格まで否定されたとは思わない。採用面接は実際に人と会っていろんな話をした上で不合格と言われるので結構堪えるのだろう。

皆さんによく覚えておいてもらいたいのは、採用には会社の都合があるということだ。外交的な営業向きの人を採用したいと思っている会社もあれば、コツコツやるタイプの人を採用したいと思っている会社もある。更に言えば、人は30分や1時間の面接で、本当に相手のことなど分からないということだ。もっと言えば、人は自分と似た人間に好感を持つ。私もサラリーマン時代に人事部で採用担当を長くやったが、リクルーターは必ずといっていいほど自分に似たヤツを引っ張ってきた。

だから採用面接で蹴られたからといって落ち込む必要などない。社会人になれば上司に評価される。私もサラリーマン時代に多くの上司に評価されたが、上司によって抜群の評価をもらう時もあれば、最悪の評価をされる時もあった。結局人の評価などあてにならないのだ。

問題は人に悪い評価をされることではなく、自分で自分がダメな人間だと認めてしまうことだ。自分が自分でダメだと思った時に全てがダメになるのだと思う。世の中には捨てる神もあれば拾う神もある。自分を信じて就職活動を乗り切ってもらいたい。就職活動の失敗で皆さんの人生全体が失敗になるわけではない。就職は長いキャリアのほんのスタート地点でしかないのだから。

以上

(文字数：996字)

第16回

「私自身のキャリアについて—①」

今回から本来のテーマである「キャリア・デザイン」について書いていくつもりだ。キャリア・デザインを考える上で、まずは私自身の今までのキャリアについて簡単にご説明しようと思う。あまり面白くない話かもしれないがしばらくお付き合い願いたい。

私は海外へ製鉄所を作りに行くプラント建設業のエンジニアとして社会人のスタートを切った。なぜそうなったかを説明するには、私の中学時代にまだ遡って話をしなければならない。私の中学時代に世の中を騒がせていたのはオイルショックだった。原油の高騰で物価が極端に上がり、トイレットペーパーを買うためにスーパーに長蛇の列ができるような時代だった。

岡山のど田舎で育ち、算数と理科が得意なだけの井の中の蛙だった私は、憂国の士気取りで、「これからの日本はエネルギー問題を解決しなければならない」と考え、太陽エネルギー研究所を持っていた東北大学を志した。

これはウソではないのだが、東北大学を選んだのには、あまり人には言わないもう一つの恥ずかしい理由があった。私は共通一時試験（今のセンター試験）元年の世代で、大学入試が共通一次試験と各大学で行なう二次試験に分かれた最初の年の受験生だった。私は英語が大の苦手で、二次試験に英語がない東北大を選んだというのも大きな理由だった。

いずれにせよ、そんな理由から研究者を目指して大学に行ったのだが、大学に入り高等数学の講義で、回りの同級生の理解レベルを見て自分の頭の悪さを痛感すると同時に、自分が研究者向きではないことも分かってきた。目標をなくしていた大学時代に世間を騒がせていたのが自動車の輸出摩擦だった。アメリカの自動車業界の労働者がハンマーで日本車を叩きつける映像が毎日のようにニュースで取り上げられていた。

これを見てまたまた憂国の士は、「これからの日本はただ物を作って輸出しているだけではダメだ。輸出によって日本も幸せになるし、輸出先の国も幸せになる、そんなビジネスで世界を幸せにするのだ。」と奮い立ったのだった。そして、その頃プラント輸出で日本最大の受注額を誇っていた神戸製鋼所に入社したのだ。

この話もウソではないのだが、もう一つ「神戸に本社がある会社なら、実家の岡山にいる両親も喜ぶだろう」という少し姑息な理由もあった。

このように私のキャリアは、時代の波に大きな影響を受け、加えて個人的なみみっちい魂胆によってスタートしたのである。

以上

(文字数：997字)

第17回

「私自身のキャリアについて—②」

神戸製鋼所へ入社後、希望していたプラント輸出部門に配属になり、製鉄所で1年間現場実習を行なった。その後設計業務や見積り業務を学び、入社4年目には当時のビルマ、今のミャンマーへ現地の工事監督として半年間赴任した。

ビルマから帰ってきて半年も経たないうちに人事部に異動になった。希望したわけではなかった。神戸製鋼所では若い技術者を人事部に異動させ、視野を拓けさせるという人事制度があった。異動を告げられた時は「何で僕が人事なんかに行かなければならないのか。僕はプラントの仕事をするためにこの会社に入ったのだ。人事なんてやりたくもない。」という気持だった。しかし、同時に当時の人事部はエリートばかりが集まる集団で、「僕も選抜されたのかもしれない」という優越感と将来への期待感があったのも確かだった。

当時の人事部はそれまでにリストラで人員が少なくなっていたが、ちょうどバブルが始まり大量採用の方針が出された頃だった。数名の人事部員で数百名の新人を採用するという目の回るような忙しさだった。毎日午前様で会社に泊まることもよくあった。3ヶ月間土日も含めて1日も休まなかった期間があったのを今でも覚えている。

人事部に移ってからの猛烈に忙しい半年が過ぎて落ち着いてくると、エンジニア出身の僕は、周りの優秀な人達と比べて、まともな社内文書さえ書けない劣等生であることに気づき始めた。「訪問」と言う漢字を「訪門」と書いて上司にあきれられた。そんなことが続いて僕はうつ状態になっていった。いつも下を向いて、人の顔がまともに見れない状態だった。

上司にウソをついて休みを取り田舎に帰った。死んだ父の遺影をじっと見ていると、「もう一度やれるところまでやってみよう」という気持ちになった。中学校時代に使っていた漢字練習帳を携え、「ビジネス文書の書き方」という本を買って東京に戻った。

毎晩どんなに遅く帰っても漢字の勉強とビジネス文書の勉強だけはした。そうして一ヶ月もすると、自分がだれよりも頑張っているという自負心と、しだいにまともな社内文書が書けだしたという自信からすっかり元気になった。人間とは不思議なもので、少し自信が戻ってくると、「俺は事務系のヤツらが出来ない技術の仕事も出来る上に、事務系分野の仕事もこなせるのだからなかなかのものだ」と思うようになってくるのだ。その後元気一杯のままで、3年半を人事部で過ごした。

以上

(文字数：994字)

第18回

「私自身のキャリアについて—③」

エンジニア出身の人事部員は通常2年で元の技術部門に戻るのだが、私の場合は後任がなかなか見つからず、一人前のエンジニアになるために一番重要な20歳台後半を人事部で過ごしたせいで結局エンジニアには戻れなかった。

もう一つ人事部時代の大きな変化は家庭を持ったことだった。このことによっても仕事観は大きく変化した。入社当時は、プラント建設の仕事なら紛争地帯であろうがどこにでも行こうと思っていた。しかし家庭を持つと、家族と離れて何年も海外で働く仕事に急に魅力を無くした。

次の職場は元いたプラント輸出部門の企画グループだった。1985年のプラザ合意後の急激な円高でプラント輸出部隊は全く競争力をなくしていた。外部のコンサルタントも入れ、事業戦略についてかなり議論したが、結果的に切れ味のいい戦略案は出てこなかった。この活動の事務局だった私は、「元エンジニアが急に経営に関する仕事をして力不足。また、社内の同質な人達だけで議論しても斬新なアイデアは出てこない。世界には苦しい状態から蘇った会社もたくさんあるだろう。世界的な視野で経営を勉強したい」と思った。そして、社内のMBA留学制度に手を上げてアメリカに留学した。

2年間の留学から戻ると、英語を使う大きな仕事を転々とした。東南アジアで現地の巨大資本と組んで製鉄所を作る計画を進めた。その後は、建設機械部門で外国企業との全世界提携の交渉を担当した。自動車業界でいえば、日産がベンツやルノーと交渉しながら、結局ルノーと提携した、あのような提携劇の水面下の交渉をしていた。

この世界提携の基本合意がなされた直後に私は会社を辞めることにした。退職の一番大きな理由は、米国への留学でアメリカの優秀層が自らリスクを取り新しい価値を生み出そうと挑戦している姿を目の当たりにしたことだった。カッコイイと思った。留学前までは一部上場の大企業で活躍していることに自負心があったが、そんな事には価値を感じなくなった。

アメリカにはこのチャレンジ精神があるから、日本はどこまで行ってもアメリカを抜けないのだと思った。日本も、優秀な人達が安定を求めて就職するのではなく、リスクを取って新しい価値を生み出すような国になればいいなと思った。そして、そう思うのであれば、若い人達に期待するのではなく、先ず自分が自分の足で立ってみようと思った。そして、何の計画もなく退職したのだった。

以上

(文字数：993字)

第19回

「私自身のキャリアについて—④」

退職して3ヶ月は家族と過ごす時間だけを大切に、4ヶ月目から真剣に将来のことを考え始めた。「これからは組織の後ろ盾がなく一人で生きていくのだから自分の強みを活かさなければならない」と思い、自分の強み分析をした。しかし、強みなど何一つ出てこなかった。「強みがないならだれもやってないことをやるしかない」と思った。

数年前に祖母がクモ膜下出血で他界していたことがきっかけで、終末期医療に関する生前意思表示支援（諸外国では Living Will として知られている）ビジネスを日本で制度化しようと半年ほどかけずり回った。しかし、結局この事業は日の目を見る前に断念することとなった。

その活動中にある社長さんから「國貞さんは技術にアレルギーはないし、人事や企画の経験もあり英語もできる。私の右腕となってくれないか」と言われた。これといった専門性も強みもなく、事業一つ立ち上げられず、かなり自信を失っていた時期だっただけに、「こんな自分でも役に立つ所があるのか」と救われた思いだった。ただ、サラリーマンには戻りたくなかったので、「社長の右腕業」という看板を掲げて、ビジネスとして中小企業の社長さんの支援を始めた。

しかし、それから半年ほどは契約を結んでくれる人もなかった。その後仕事を頂けるようになってからも2年くらいは全く成果が出せなかった。しかし、「石の上にも3年」とはよく言ったもので、3年も現場にへばりついてやっていると、しだいにやるべきことも分かってきたし、少しずつ成果も出せるようになっていった。

経営は大きく「戦略」、「人」、「金」の3つの分野に分かれる。中小企業向けのコンサルタントは、「私はこれしかできません」などとは言ってられない。一人で何でもこなす必要がある。中小企業の現場で得た経験をセミナーにして大企業の管理職に教えたら、これが好評を得た。そして、最近ではその研修の内容が本になって出版されるようになった。

こうしていま、「中小企業向けコンサルティング」、「大企業の管理職向けのマネジメント教育」、「執筆活動」を3本の柱にして生きている。

いままで歩んできた道は、自分が学生時代には想像もしていなかった道だ。私は基本的にキャリアなどデザインできるものではないと思っている。では、何も考えずに人生を送ってきたかというところでもない。次回以降、キャリアに関して大切だと思っていることを書いていきたい。

以上

（文字数：999字）

第20回

「キャリアの先にある人生」

この4回ほどは私のこれまでのキャリアについて書いてきた。それは、今年のコラムの本題である「キャリア・デザイン」について書こうとすれば、理想論や一般論ではなく、やはり自分の経験に絡めて何かを伝えなければならないと思ったからだ。

いざ、自分の経歴を書き終え、それを踏まえてキャリア・デザインに関するアドバイスを書こうとして、はたと筆が止まってしまった。「そもそもなぜキャリアをデザインしなければならないのだろうか」と思ったからだ。

生きていくためだろうか？でも今の時代、社会保障も整っているので飢え死にすることはない。では、だれもがうらやむ輝かしいキャリアを築き上げるためだろうか？しかし、そんなことをして個人の人生にとって何の意味があるのだろうか？しっかりとした計画を立て、安定した人生を歩むためだろうか？しかし、いかに計画しようとも人生は計画通りにはいかない。スタンフォード大学のクランボルト博士によれば、キャリアの8割は偶然によって決まるのだそうだ。

そう考えるとキャリア・デザインなど必要ないようにも思えてくる。それよりもっと大切なのは、どのような人生を歩むかを考えることだろう。このコラムの読者の大半は20歳代の若者だろう。将来の可能性に満ちた若者達が、どの会社を選ぶべきか、どの職種を選ぶべきかなんてことばかり考えているとすれば寂しい限りだ。地球が誕生して46億年、人類が誕生してから100万年といわれるが、その悠久の時の流れの中のほんの一瞬である100年ほどを私たちは生きるだけだ。しかし、たった一度しかない儂い人生だからこそ、どう生きるかが大切なのだと思う。

何も企業に就職することだけが人生ではない。むしろ、そんな生き方は最もありふれた生き方かもしれない。発展途上国に行って恵まれない人達を支援する人生だっていい。環境保護活動に人生を捧げるのもいい。田舎で自然と共にゆったりとした人生を歩むのもいい。伝統工芸の職人になるのもいい。小さなレストランを経営するのもいい。ベンチャー企業を興すのもいい。若いうちはもっと大きな視点で人生を考え、多様な価値観を知り、いろんな生き様に触れ、自分の歩むべき道について考えてもらいたいと思う。

キャリアの8割は偶然によって決まるのかもしれないが、どんな人生を歩むかの大きな方向性は皆さん自身が選び取れるのだから。世の中の常識などに惑わされないでほしい。

以上

(文字数：994字)

第21回

「夢やビジョンより理想と志」

私たちの人生は一度しかない。もし、やりたいことがあるなら是非挑戦してもらいたい。そういう意味で夢のある人生は素敵だと思う。子供達がある分野で活躍している有名人を見て「自分もこうなりたい」と胸をときめかせている姿はほほえましい。起業している人の多くは強い想いを持っている。それは金持ちになりたいとか有名になりたいとかという想いであっても、その欲望に人間の逞しい生命力を感じる。

そういう夢やビジョンの大切さを認識した上で敢えて言いたいのは、現代は「夢・ビジョン・やりたいこと・好きなこと」といった言葉に毒され過ぎているということだ。夢やビジョンがなくて立派な生き方をしている人はたくさんいるし、やりたいことや好きな事をやっけていなくても幸せな人は大勢いる。

私のイメージでいえば、「夢・ビジョン・やりたいこと・好きなこと」には「自分勝手」というニュアンスがつきまとう。「私は〇〇になりたんです」という人に対しては「勝手にやってください」といった感じで何の感慨も沸かない。

私が若い人に望むことは「夢やビジョン」より「理想と志」を持ってもらいたいということだ。世の中の常識はデタラメばかり。「お客様第一主義」などと口ではいっているが、その裏では自分の会社の利益しか考えていない会社がたくさんある。中小企業の弱みにつけこんで儲けている金融機関がある。学生や企業の無知につけこんで暴利を得ている就職・採用支援会社がある。パフのメルマガであんDが指摘している通りだ。いまの社会は変えていくべきことが一杯ある。

人類の歴史はいつの時代も、若い世代の理想とエネルギーが世の中を変えてきた。自分本位の夢やビジョンではなく、「だれかの役に立つ」「人を幸せにする」「不正を正す」「弱者を救う」といった気持ちをベースにした「理想と志」を持ってもらいたいと思う。人類の英知が人間の正しい生き方としてたどり着いたもののひとつが論語の「仁」と「義」である。ヤクザではないが、「仁」と「義」が、私たちの人生やキャリアを作っていく根底になれば、人は結局幸せにはならないと思う。

パフのメルマガに親が子供のキャリアに望むのは「安定」だと書いてあった。私も一人の親としてその気持は分かる。しかし、人間として価値ある一生を送るには、「安定」よりもっと大切にすべきものがあると思う。私の子供にもそう伝えていきたいと思っている。

以上

(文字数：989字)

第22回

「自分の人生を大切にしていこう」

前回のコラムを読んでもらった学生からメールをもらった。「すごく納得します。ただ、私もたまに『夢やビジョン』に傾く時もあるのが現状なのですが。」と書いてあった。私が「夢やビジョン」を追うことは自分勝手な感じがすると、かなりネガティブに書いたせいだろう。

私も若い頃は、「大きなプラント建設のプロジェクトマネージャーになりたい」とか「世界を舞台に仕事がしたい」とか「大きな会社の経営者になりたい」とかと思っていた。そのような欲望や夢が私たちにエネルギーを与えてくれるのは間違いない。

若いうちはそれでいいと思う。私はもう47歳だ。47歳の人間がいままで自分の人生や周りの人の人生を見てきて、いつまでも自分の欲ばかりを中心に生きてきた人はあまり幸せになっておらず、逆に「だれかに喜んでもらえる」「だれかの役に立つ」という気持ちが根底にある人は幸せになっていると思うのだ。若いうちから自分の欲望を抑えつけて善人になろうとする必要はないが、いつかそのことに気付いてほしいと思うだけなのだ。

先週、娘が通う中学校の卒業式の話聞いた。ほとんどの参加者が涙した卒業式だったようだ。娘が通う中学では1年前に一人の女子生徒が心臓の病気のせいで、学校で倒れて亡くなっていた。もし彼女が生きていたら仲間と共に先週卒業式を迎える予定だった。

学校の配慮で彼女への卒業証書が用意され、彼女の名前が呼ばれた時には彼女のクラス全員が彼女の代わりに「ハイ！」と返事をした。校長先生は卒業証書を持って列席しておられた彼女のご両親の前まで行かれ、ご両親の前で卒業証書を読み上げられたのだが、涙で声がつまり言葉にならなかったようだ。

この話を夕食の時に娘から聞き、言葉が出なかった。言葉を出せば涙が出てきそうだった。私は親としてそのご両親の気持ちを思った。亡くなられた彼女は生まれた時から心臓が弱く、医者からもいつまでもつか分からないといわれていたそうだ。であれば、ご両親は毎朝娘を学校に送り出す時、「今日も娘が無事に学校から帰ってきて、娘の笑顔を見れるだろうか」と毎日思っておられたはずだ。

私は娘に「本当にどんな人生を送ってもいいよ。ただ、人生を大切に生きてもらいたいとお父さんは思う」言った。どんな生き方でもいい。ただ、一度しかない皆さんの人生を大切に生きてもらいたい。生きている、ただそれだけで有難いと思う。

以上

(文字数：984字)

第23回

「人生に正解なんてない」

前回のコラムで「人生を大切にしてください」と書いた。しかし、「どう大切にしたらいいのだろう」「どんなキャリアを送れば納得のいく人生になるのだろう」と思う人がいるかもしれない。若い人達に理解しておいてもらいたいことは「正しい人生なんてない」ということだ。世の中の常識や大人達の忠告はデタラメなものが多い。そんな常識やあるべき論に惑わされることなく、いつも自分で考えて自分で判断することを大切にしてもらいたいと思う。

「人生の目標を持て」とか「計画を立てろ」とか言われる。大学受験など短期のものであれば目標も持てるし計画も立てられるだろうが、長い人生の場合はそう簡単ではない。

「夢を持て」とか「やりたいことを見つけなさい」と言われるが、夢なんて人間の成長につれてコロコロ変わっていく。「やりたいこと」と言われても、仕事なんか実際にやってみないと本当の所は分からないし、どんな仕事でも一生懸命やっていたらやりがいが出てくる。

「大きな組織は安定している」と言われるが、大きな組織に入ったからといって幸せになれるわけではない。更には言えば、組織が安定していることと自分が安定していることは全く異なる。本当に安定しているという状態は、自分自身が高い能力を身につけているということではない。

そもそも、どのようにキャリアをデザインすればいいのか。その方法論自体を自分で考えてもらいたい。人生は数学の問題のように公式に当てはめたら答えがでるようなものではない。考え方のフレームワーク自体から自分で考えるべきなのだ。

自分で考えるということは仕事をする上でもとても大切だ。私はいまから20年ほど前にある会社の人事採用担当者だった。採用担当として学生の何を見ていたか？学生が準備してくる自己PRや志望動機などの話しは全く聞いていなかった。そんなものはだれかに指導してもらい時間をかけて準備すればだれだってそこそこのものは書ける。私は、その学生が自分で考え自分の意見持っているかどうかだけを見ていた。なぜなら、仕事の現場は正しい答などないことばかりであり、仕事をする上で大切なのは、まずは「自分で考える」ことができるかどうかだからだ。

人の意見を素直に聞くことは大切だ。しかし、人生に正解などなく、自分で考え自分で決めることがとても大切であり、「そうしていいのだ」ということを認識しておいてもらいたい。

以上

(文字数：987字)

第24回

「だれかの役に立つこと」

キャリア・デザインのことを考えてくると、キャリア・デザインとはまさにライフ・デザイン、人生設計のことだと思う。大きく高い視点で自分の人生をどう生きるかを考えることだ。そういう意味では、第10回のコラム「あなたにとって大切なものは何ですか」で書いたように、自分自身が何に価値を置き、何をすれば幸福と感じるのかを知り、それにしたがって生きれば良いと思う。

そして、何が大切かは人によって違う。両親を大切にすること、自己実現、夢をかなえる、金持ちになる、いろんな価値観があっていい。僕は22歳の頃、とにかく大きな仕事をしたかった。ひとつのプロジェクトが2千億円というようにとてつもなく大きい仕事のプロジェクト・マネジャーなんてカッコイイなと思った。40歳の頃は組織に頼らずリスクをとって新しい価値を生み出そうとする起業家がカッコイイなと思った。

振り返れば、僕はただ「カッコイイ」と思えるかどうかだけで人生を選んできたように思う。いかにも単純な人間だ。そんな人間でもこうやって生きているのだから、皆さんも自信を持って自分の大切なものを大事にして生きてもらいたい。

キャリアはデザインできるものではないと何度も書いてきた。もっといえば、デザインできる人生などあまりにもつまらなそうに思える。ただ、自分が何を大切に思うかというその自分の心に素直に従って生きたらいいのだ。ただ、その大切に思うことの中に、できれば「だれかの役に立つ」ということを入れておいてもらいたい。

これも第5回のコラム「仕事なんて何だっていい」で書いたように、仕事をしていてどんな時に幸せを感じるかと聞くと、多くの人が「だれかの役に立っていると感じる時」と答える。私は40歳でサラリーマンを辞めて独立した時、自分は何を大切に生きてきて、これから何を大切に生きていこうとしているのかを考えた。「貢献」「独創」「挑戦」というような言葉が挙がってきた。当時は、こう考えるのは私の個性だと思っていたが、少なくとも「貢献」は多くの人が大切にしていることだし、このことがあれば多くの人が幸せを感じることなのだと知った。

キャリアを選んでいく際に、自分にとって損か得かではなく、「自分は何を通して人の役に立てばいいのだろうか」という視点で考えてもらいたい。その視点さえあれば、どんなキャリアを歩もうと幸せになれるのではないかと思うのだ。

以上

(文字数：991字)

第25回

「自分に与えられた運命の中で」

多くの人がキャリアは戦略的にデザインしていかなければならないと思込まされている。夢や目標を持ち、それを達成していくことが正しい人生の歩み方だと思込んでいる。たしかに、達成したい明確な目標があれば人はやる気になる。そういう意味では若いうちに明確な人生の目標や夢を見つけることができた人は幸せだ。

しかし、若いうちから「これが私の人生の目標だ」というようなゆるぎない夢を持てる人は少ない。「こうなれたらいいのにな〜」くらいの夢しかないのが普通だ。そして現実には、例えば「大企業に入りたい」と思っても入れず、夢は実現できない人のほうが多い。

第20回のコラム「キャリアの先にある人生」で書いたように、自分の人生の大きな方向性は自分で選べる。しかし、選べない人生もまた多い。希望する会社に入れない、希望した会社に入っても希望する部署に配属にならない、やりたくもない部門へ異動させられる、人生には自分ではどうしようもないことが多い。

私は、自分の人生を戦略的に築きあげるより、与えられた環境をプラスに変える努力をするほうが大切だと思っている。何度も言ってきたようにどんな仕事でも楽しさは見出せる。大企業に入らないと幸せになれないとか、ある特別な職種の仕事をしないと幸せになれないということなどない。

「希望した配属先ではなかったも、そこで頑張れる人は立派になる。」私は人事部時代に、多くの人の配属先とその後の成長を見ていてそう思った。この話をすると私はいつも三菱ふそうのドイツ人の社長さんのことが頭に浮かぶ。彼は日本に来てから謝るばかりだった。それも自分が犯した過失ではない件で謝っている。心の中いかにばかりかと思う。

私ごときの若輩がいうのも何だが、あの社長さんは現在の境遇の中からたくさんを学ばれていると思う。世の中には理不尽なことが多いこと、「自分は悪くない」と言っははいけない場合があること、人生には辛抱しなければならぬことがあることなどなど。そして、その経験は必ずやあの社長さんの次のキャリアに大きくプラスに働くとする。

いつも自分に与えられた境遇で一生懸命努力する、能力的にも人格的にも常に自分のレベルを上げようとする、笑顔で元気よくいつも周りの人に感謝する。こんな人は周りが放っておかない。日々、自分自身が精進していれば、キャリアはその能力と人格に合った方向へ自然とデザインされていくのだ。

以上

(文字数：994字)

第26回

「戦略的にキャリアを考える」

いままでキャリアなどデザインできるものではないと書いてきたが、今回は敢えて「キャリアを戦略的にデザインする」ことについて考えてみようと思う。

私は、就職活動における「自己分析」と「業界研究」は、ビジネスの戦略論におけるSWOT分析、つまり「自社の強み(Strength)と弱み(Weakness)の分析」と「市場の機会(Opportunity)と驚異(Threat)の分析」によく似ていると思ってきた。ビジネス分野での戦略論の基本はこのSWOT分析だ。たしかに、ものごとを検討していくには、まず対象を分類して分かり易くしてから分析していく必要がある。何事でも論理的に考えるということは大切だ。

しかし、ビジネスの現場ではこのSWOT分析は機能しない場合が多い。その理由の一つは、同じ業界、同じくらいの規模の会社がこのSWOT分析をやると、その分析結果は似たようなものになるからだ。他の会社と似たような戦略は結局戦略にはならない。なぜなら、戦略の要諦は「差別化」だからだ。差別化されていない戦略では競争優位には立てないのだ。

キャリア・デザインをビジネスの戦略作りになぞらえて考えれば、なぜキャリアをデザインすべきなのかといえば、より優れたキャリアを作ってくためだろう。「好きな事をしているから貧乏でもいいんです」と言う人がいたなら、その人はキャリアなどデザインする必要はない。キャリアをデザインすべきだと考えるのは、自分のやりたいことをやって、経済的にも満足した人生を送りたいと思うからだと仮定してみよう。

もしそうであれば、皆さんは人と違う特徴を持たなければならない。皆と同じキャリアであれば、将来あなたはやりたいこともできなければ、経済的に満足できる人生も歩めないだろう。なぜなら、あなたの代わりができる人は世の中にたくさんおり、もしあなたが自分の思い通りにしようとしたら、高い賃金を望んだりすれば、会社はより素直に命令に従い、より安く採用できる人に取り替えればいいだけだからだ。

何度も言うが、有名な会社に入ったら皆さんに特徴が備わるわけではない。特徴を持つためには、あなた自身が「人より高いレベルのなる」か「人とは違ったことをする」しかない。そういう意味では、キャリアをデザインするとは、どこの会社に入るとかではなく、どうやって自分に特徴をつけていくかを考えることだろう。

以上

(文字数：985字)

第27回

「常識とは違う行動をとる」

前回のコラムで、「特徴を持つためには『人より高いレベルになる』か『人とは違ったことをする』しかない」と書いた。「人より高いレベルになる」には、自分の強みを早く発見し、得意分野で精進するのがよいだろう。

しかし、この「自分の強み」というのがなかなかわからない。仕事の本質は経験してみないとわからないから、若い君たちが机の上でウンウン言いながら考えてもなかなか見つからないだろう。私は社会に出て25年経つけど、いまだに自分の強みは明確にはわからない。それに、「人より高いレベルになる」のはなかなか大変なことだ。

今回は「人とは違ったことをする」ことについて考えてみたい。だいたい、人と同じことをするとろくなことはない。大量採用している人気企業に入社したら同期がたくさんいて入社後の競争は激しい。また、歴史が証明しているように、多くの優秀な大学生がその当時の花形企業に就職したが、その人達が退職する頃にはそれらの企業は衰退している。ひと頃の石炭産業や繊維産業がいい例だ。

私はみなさんに、人と違う判断や常識を疑った行動をとることを勧めたい。人気企業には行かず、いま最も人気なくなっている会社に就職する。そうすれば、会社はみなさんのことを大切にし、期待もしてくれるだろう。同期が少ないから重要な仕事を任されるチャンスも大きい。仕事力は経験によって伸びていくものだから、そんな会社に入って大事な仕事を任されればスゴいスピードで成長していく。

自分が嫌だと思っていることを仕事にするのもいい。自分が嫌だと思っていることがソコソコ出来れば、その嫌な分野では自分が本来持っている別の才能が活きる。私は一番嫌だった研修講師の仕事をしているから、いま優位性が出てきたのだと思う。人前で話をするのが好きな人は緻密さにかける傾向がある。そんな人の中では緻密さが生きてくるのだ。

大企業の中には私くらいの才能の人間は掃いて捨てるほどいる。もし、私に存在価値があるとすれば、それは人と違う行動をとってきたからだろう。技術屋なのに会計の本を書いている。MBAを持っているのに中小企業を相手にしている。

人生全般に渡って、そんな常識とは違う生き方をすれば特徴が作り易くなる。就職活動も同じだ。だれもがやる自己分析と業界研究をやっても特徴的なことは言えない。自分で考えて自分独自の就職活動を実践している人は面白くて魅力的な人が多い。

以上

(文字数：995字)

第28回

「絞り込み突き抜ける」

今回も「キャリアを戦略的にデザインする」ことについての続きだ。ビジネス戦略論を勉強すると、STP、4P、3Cといった言葉が出てくる。これらの説明はここではしないが、欧米のMBA流の戦略論は論理的に考えることが基本だ。

ビジネス分野で使われる論理的戦略論の中で効果的であり且つキャリア・デザインにも応用できると思われるのがSTP理論だ。STPとはSegmentation、Targeting、Positioningの略で、要は市場をセグメントに分割し、どのセグメントの中で戦うかを明確にし、ターゲットとしたセグメントの中で勝つには何をすべきかを考える方法だ。

STP理論を説明する例としてはPanasonicのLet's Noteがいいだろう。Panasonicはコンピューター分野への参入はかなり後発だった。後から来てどうやって勝つか。コンピューターの市場はデスクトップ、ラップトップ、モバイルに大きく分けられる（Segmentation）。Panasonicは市場の伸びが一番大きかったモバイルの分野に的を絞った（Targeting）。そして、その分野で競争優位性を獲得するために、軽量・長時間・頑丈という3つの特徴を作り出して成功したのだ。

人も組織もそれらが持つエネルギーには限りがある。だから、競争優位に立とうと思えば自分の持つエネルギーを何かに集中すべきなのだ。そして、何かに集中して突き抜けることが出来れば世界は違ってくる。

有難いことに私が書いた「財務3表一体理解法」という本がベストセラーになった。1冊の本がベストセラーになっただけで、仕事の依頼は極端に増えた。営業しなくても仕事がやってきてくれるのだ。研修の講師料も2倍以上になった。

対象を狭い範囲に絞り込むほどエネルギーの密度は上がり突き抜け易くなる。しかし、どんな分野でもだれもが一生懸命に仕事をしている。そんな中で突き抜けるのは容易なことではない。どんな仕事でもその仕事が一通りできるようになるには3年はかかる。突き抜けるには5年や10年はかかると思っていたほうがよい。だから、3年くらいで職を転々としているようでは、優位性のあるキャリアなど作れるはずがないのだ。

STPで大切なことは「何に絞り込むか」を決めることだ。多くの人が競争しているような分野で突き抜けるのはなかなか難しい。他人の真似をせず、自分で考えるしかないのだ。

以上

(文字数：995字)

第29回

「先を読み自分で決める」

「この世に生き残る生き物は、最も力の強いものでもなく、最も頭のいいものでもなく、変化に対応できる生き物だ。」ダーウィンの言葉だ。この言葉は戦略論にも通じる。戦略で最も大切なことの一つが時代の変化に対応できるかどうかだ。もっと積極的に言えば先が読めるかどうかだ。

石炭掘りのプロになっても残念ながらいま仕事はたくさんない。私が社会人になった頃は英文や和文のタイプを打つタイピストという職業が華やかだったが、いまタイピストで生計を立てている人はほとんどいないだろう。では、どんな仕事が将来有望なのだろう。

将来を読むのは極めて難しい。経済予測が当たることはまずない。将来予測として、日本では人口減少と高齢人口の増大が同時に進むことは間違いない。環境問題も世界的に関心が高まっていくだろう。では、介護ビジネスや環境ビジネスに携わっていれば安泰なのか。そんなことはない。そんなだれもが知っている方法で先を読んだとしても、その方向には多くの人が進み、競争が激しくなるだけで差別化は難しいのだ。

ではどうするか。ここでもやはり自分で考えるしかない。僕も僕なりに先がどうなるか考える時がある。時代は振り子と言われる。何が正しいとか間違っているというようなことではなく、ある方向に触れすぎると反対の方向に戻っていくのだ。

前回のコラムで「突き抜けろ」と言ったが、20世紀の最後の10年はあまりにもスペシャリスト思考に振れ過ぎた。これからはもっとゼネラリストが重要視される時代になるだろう。もっと長いスパンで見れば、この100年くらいは企業組織が極端に肥大化した時代だった。しかし、長い人類の歴史からいえば、人は組織で働くのではなく個人で働くのが基本だった。日本でも戦前は職人や自営業の人がたくさんいた。これからはインディペンデントな生き方を志向する人が増えてくるのではないだろうか。

しかし、そんな予測も当たるのかどうかわからない。結局は自分で考えて自分で決めていくしかないのだ。

先日高校生の息子がサッカー部を辞めた。かなり悩んでいたようだ。親としていろんなアドバイスもした。彼は悩みに悩んだあげく辞めることに決めた。それが彼にとって良かったのか悪かったのか僕にはわからない。ただ、先ずは彼を褒めてやった。世の中に自分の考えで自分の人生を決めていく人は少ない。自分で考え自分で答を出すことがとても大切だと僕は思っている。

以上

(文字数：997字)

第30回

「戦略に感性を持ち込む」

第1回のコラムでキャリアなどデザインできるものではないと書いたが、この数回は敢えて「キャリアを戦略的にデザインする」ことについて書いてきた。「戦略的にキャリアをデザインする」とは「先を読み、人とは違った特徴を作り出すこと」だろう。そのためには物事を論理的に考える必要がある。

ビジネスの世界でも戦略論の基本は論理的・分析的に考えることだ。既に紹介したSWOT分析のように自分の強みと市場の機会を分析する。STP理論のように目指すべき市場を明確にして、その限られた分野の中で突き抜けるために何をすべきかを考える。ビジネス分野での戦略論はこのように論理的・分析的に考えるのが基本だ。

しかし現実のビジネス社会でも、この論理的・分析的な戦略策定方法が行き詰っている。論理的に考えて作り出した戦略がうまくいっている例などほとんどない。ビジネスモデルなどとカッコよくいうが、実態はいろいろ試行錯誤して最後に残っているものをビジネスモデルといっているに過ぎないのだ。「戦略」は論理的に考えて作り出すというイメージがあるが、現実的には戦略は論理的には作り出しにくいのだ。

私は戦略作りにおいてもっと会社の感性を大切にすべきだと思っている。なぜなら、組織が「何を大切に思うか」「何をやりたいか」というようなことが組織の感性であり、そのことこそがかけがえのないその組織の個性となり、この個性こそが他社との違いを作る第一歩になると思うからだ。

第11回のコラムでも書いたように、将来皆さんが「人とは違った特徴を作りたい」と思っているのであれば、キャリア・デザインにおいても直感と個性を大切にすべきだと思う。戦略的キャリア・デザイン論の最後が「直感を大切にしろ」では少し違和感を覚える人もいるかもしれないが、論理と直感を融合したところに戦略策定論の新しい道が開けていくと私は思っている。

私は20歳代、30歳代を常識にとらわれた「あるべき論」で生きてきた。「大きな会社に勤めるべきだ」「組織のトップを目指すべきだ」などなど。しかし、50歳を目の前にして、それらのあるべき論が自分の心の叫びではなかったことを知った。そして、素直に自分の心の声が聞けるようになり、生きるのが少し楽になったような気がする。

ただ、その自分の本当の心が聞けるようになるには、たくさんの経験を積みなければならないのかもしれないのだが。

以上

(文字数：987字)

第31回

「ゴールラインよりスタートライン」

キャリア・デザインの話しになると、「目標を持ちなさい」とか「ビジョンを持つべきだ」と言われる。しかし、多くの人にとっては3年先くらいの短期のビジョンは持てても、人生の大きなビジョンとなるとどう考えていいのかわからないというのが実態ではないだろうか。

私も若い時は人生のビジョンを持つべきだと思っていたこともあった。しかし、社会に出て25年も経つと、人生は思うようにいかないこと、また自分自身の価値観も歳と伴って変わっていくことがよくわかった。そうなってくると、人生が縁や偶然によって大きく変化していく醍醐味に背を向け、一度しかない人生なのに、小さい自分の価値観の中で目標を立て、それをあくせくと達成していくような人生は面白くない息が詰まるような気がする。

ビジョンや目標は無理やり作り出すものではなく、人生を歩む過程の中で自然と出てくるものではないかと思う。私は独立した時にビジョンや目標を作ったが、それは何ひとつ実現しなかった。しかし、右往左往しながら経験してきた今の仕事の短期的な目標は明確になっている。それをひとつひとつ達成していく過程で更に大きな目標が出てくる予感がある。

そういう意味で私は、キャリアにおけるゴールを設定するより、先ずはスタートラインに立つ事が大切だと思う。スタートラインに立ちさえすれば多くの経験ができる。楽しい経験もあれば苦しい経験もあるだろう。しかし、どんな経験であれ、人は経験の中で何かを感じ何か学び成長していくのだ。想像してみればわかるが、10年フリーターを続けた人が正社員になれる可能性は極めて少ない。

就職の超氷河期にうまく就職できず地元の工事会社に就職し、高卒の人と同じ現場工事をしている人を以前紹介したことがある。彼はその後現場仕事を経験しながらすさまじい勢いで資格を取得している。会社の中でも既に一目置かれる存在になった。その会社はいままで通りの工事業務ではいずれ失速してしまうだろう。たぶんその時、現場も知り知恵もある彼が会社の救世主になるのではないかと思っている。

ゴールを考えるよりスタートラインに立ち、ただガムシャラに進むことが大切なのではないかと思う。いま無駄に思っている仕事の経験がいずれ必ず役に立つ時が来る。少なくとも私の人生ではそうだった。目の前の仕事が価値あるかどうかなど、その時点ではわからないことのほうが多いのだ。

以上

(文字数：984字)

第32回

「精進」

キャリアをデザインするためには、ゴールを考えるより先ずはスタートラインにつくべきだと書いた。では、スタートラインについたら何をするか。それはただ「精進」の一言だと思う。精進とは一生懸命に努力すること。

目の前の仕事がやりたいかやりたくないか、好きか嫌いか、得意か苦手か、そんなことはどうだっていい。ただ何も考えずに一生懸命に取り組めばいいと思う。仕事に一生懸命取り組んでいないと、つまらない考えばかりが頭に浮かぶ。「こんな仕事に意味があるのだろうか」「就職先を間違えたのではないか」「自分は能力が低いのではないか」「こんなひどい上司のもとでやってられるか」などなど。

しかし、そんなことを考えるのは、自分で成果が出せるようになってからでいい。仕事の何たるかがわかる前に、キャリアについて頭で考えても考えは悪い方に行くばかりだ。

周りの先輩や上司を見るとみんな効率よくスマートに仕事をこなしているように見えるだろう。しかし、そんなカッコイイ上司や先輩も若い頃には必ず苦しい時期を経験し、それを乗り越えてきている。精進し壁を乗り越えないと壁の向こうは見えない。成長している人は精進している。精進していない人は壁の手前の狭い世界で悶々としている。

精進している人はすぐにわかる。目つきもエネルギーも周りへの気配りも、何もかもが違うのだ。成果はすぐに出るものではないから、精進している人が必ず成果を出しているとはいえない。しかし、精進している人は遅かれ早かれ必ず成果を出す。それは人が見ているからだ。精進している人には心を動かされる。精進している人はどうにか助けてあげたいと思う。仕事をお願いするなら精進している人をお願いしたいと思う。それが普通の人間の感情なのだ。

僕が安心して仕事をお願いすることが出来る人はどんな人だろうかと考えてみると、それは「自分の力で何かを乗り越えてきた人」であり「どん底まで落ちた経験がある人」である。仕事は先が見えない。必ず難題にぶつかる。そんな時、自分の力で何かを乗り越えてきた人は、またその難題をどうにかしてくれる。更に、どん底まで落ちた経験のある人は少々のことでもストレスに負けたりはしない。ストレスを感じるレベルが違うのだ。

精進し、辛抱し、何かを自分の力で乗り越えてもらいたい。そんな人のキャリアは、どんな仕事をしていようとも、必ず将来輝かしく開けてくると思うのだ。

以上

(文字数：993字)

第33回

「覚悟を決めて突き抜けるまでやる」

多くの大人達が「好きな仕事を見つけろ」とか「仕事出来る人は仕事を楽しんでいる」とかという。確かに大きな成果を出している人は、自分がやっている仕事が好きで、その仕事を楽しんでいる。野球のイチローもサッカーの中村俊輔もそうだろう。

しかし、若いうちから好きな仕事を見つけられる人はごくまれな幸せな人だ。そんな人達は努力もしたろうが、そもそもある程度の才能に恵まれている。自分が秀でていて一番になれるから努力ができるのだ。自分が他の人より優れた所を持っていれば、認められるし注目されるから無理しなくても努力できる。そもそも才能があるから、やっтерることが楽しいのだ。

ただ、ほとんどの人は凡人なのだ。特別優れた才能があるわけでもないし、何が好きなのかもわからない。そんな得意分野もなく特別好きなこともない普通の人が、「好きなことを仕事にしろ」とか「仕事を楽しめ」などと言われても戸惑うばかりだ。

そんな普通な人は「好きなことを見つける」より、ただ偶然に与えられた目の前の仕事を好きな仕事に変えていくことのほうがはるかに大切だと思う。

僕の人生は常にそうだった。僕の母親は「お前は頭が悪かったのに勉強させ過ぎた」とよく言う。僕は今でも高校生の息子に数学を教えている。息子は「親父は頭がいいから」と言うが、僕が高校時代にどれだけ膨大な数の問題を解いたか彼は知らない。僕は数学が出来るのではなく、数学が出来るようになったのだ。

サラリーマン時代は夜の12時前に家に帰ることにならないような生活を続けていた。僕は平日の夜や土日も含めて家のリビングに居ることはめったにない。僕が留学したり会計の本を書いたら、周りの人達は「頭のいい人はいいな」なんて言う。しかし、彼らは僕がどんな生活をしていて、英語や会計をどれくらい勉強してきたか知らない。

凡人にとって仕事はそもそも楽しいものではない。その好きでもない仕事をしこたまやって、人より上の仕事が出来るとなると、周りの人に認められお客様にも喜ばれるようになって初めてその仕事が楽しくなるのだと僕は思う。そして、そうなるまでには5年や10年はかかるのだ。

もし、楽しく仕事出来るようなキャリアをデザインしたいのなら、好きな仕事を探すより、覚悟を決めて、目の前の与えられた仕事が好きになるまでしこたまやることだと思う。成功している人は人一倍努力している。

以上

(文字数：990字)

第34回

「成果をあげるための覚悟と人間力」

ビジネスの世界では成果が全てだ。「仕事は出来ないけれど人柄はいいんです」といわれる人は人間的には愛すべき人かもしれないがビジネスの世界では残念ながら高い評価は受けない。

成果をあげるには「能力とやる気」を高める必要があるといわれる。能力とは技能、知識、スキル、思考力、分析力、文書作成力、プレゼンテーション能力等々だ。そしてやる気を高めるために「好きな事を見つけないさい」「やりたいことやりなさい」などと言われ、会社側としてはボーナスや福利厚生施設などのアメを与えたり、ノルマや罰則などのムチを使ったりして従業員のやる気を高めようとする。

以上が成果に係わる「能力」と「やる気」の一般的な解説だ。しかし、僕はこの「やる気」を高める要因のひとつに「覚悟」があると思う。英語でいえば「コミットメント」という言葉かもしれない。つまりそれは「何かをやり抜く決意」だ。

多くの社会人を見ていても「好きな事をやっています」なんていう人より「僕は就職先が決まらずこの会社に拾ってもらいました。ですから、この会社で一生懸命働くんです。」と言う人のほうが迫力があるし、いい仕事をしている場合が多いと思う。仕事の種類なんて何でもいいのだ。好きなことを探すより「この会社でこの仕事をやり抜く」という覚悟のほうが大切だ。

更にいえば、成果は「能力」と「やる気」だけで決まるものではない。成果には「運」が大きく影響する。この「運」は自分ではどうしようもないことのように思える。しかし、この「運」ということをもう少し「人」に焦点を当てて考えてみると、「運」を引き寄せることができる人と引き寄せることが出来ない人がいるのは明白だ。

運を引き寄せることができる人はどんな人だろう。それは、笑顔・挨拶・礼儀・約束を守る・責任感・誠実・一生懸命・努力・辛抱・利他的、こんな言葉がピッタリの人達である。そして、そんな素敵な人の周りには同じような素敵な人達が集まり、運を引き寄せていく。

若いうちはいろんな人とつきあって、視野を拓けたり人づき合いの修行をしたりしなければならない。そうやって人生を重ねていく中で素敵な人たちと仕事ができるようになれば、仕事も楽しいし良縁が広がっていく。ただ、ここで大切なのは、素敵な人つきあってもらうには、自分自身が素敵な人たちとつきあってもらえるようなレベルの人間にならなければならないということだ。

以上

(文字数：991字)

第35回

「自分らしいキャリアに結果として近づく」

私のいままでの仕事人生の中で、今ほど幸せだと思えることはない。今の働き方が一番自分に合っていると思う。47歳になってやっと自分に戻れたような気がしている。それは今までの人生の中で自分の限界を知らされた諦観によるものかもしれないし、大きな野望を持てるほどの体力がなくなったからかもしれない。理由はどうであれ、一番平穏な気持ちでいられるのだ。

たぶん、自分の素直な心に従えば、昔から私は「基本的に一人でする仕事」を望んでいたに違いない。しかし、若いうちは「グローバルに働きたい」「大きな仕事がしたい」「偉くなりたい」というような欲望のために、本当の自分が見えなくなっていたのだろう。ただ、そんな欲望を持っていたのも事実だし、その時はその時でそんな欲望を持っていた自分が本当の自分だったのかもしれない。

私は人生の計画などなく、その時々々の価値観や感性に従って生きてきた。振り返ってみれば、英語やマネジメントなど苦手な分野ばかりで仕事をしてきた。キャリアも、次につながらないキャリアばかりを積み重ねてきた。機械工学の勉強をして、人事部で働き、MBAを取得して竹とんぼ屋を開業し、結局会計の本を書いている。仕事もけっしてやりたかったことではなく、自分としては不本意な仕事ばかりしてきた。人事、コンサルタント、研修講師、みんなやりたくないことばかりだった。失敗やうまくいかないことも多かった。

僕のキャリアは全くのデタラメだ。何の計画性もない。ただ、心掛けてきたことは、目の前の仕事で成果が出るまで続けることと、節目節目では自分で決断し進路を選んできたことくらいだった。しかし、いままでの25年の脈絡のない経験は全てがつながっていて何一つ無駄になることはなかったと今しみじみ感じている。

仏教には「因果の間に縁」があるという。欧米の思想のように、結果（ゴール）を定めて、ただひたすらその結果を追い求めるような人生を送るのもよいが、人生の様々なご縁を余裕をもって経験していくという人生もいいのではなかろうか。

「仕事とは何か」、「自分とは何か」、「自分に合う仕事とは何か」などということは、結局は長い時間をかけて多くの経験をしなければわからなんじゃないかと思う。ゴールを考えるより、その時その場を大切に、自分で考え決断していくことにより、その人なりに世界は広がり、結果として自分らしいキャリアが作られていくのだと思う。

以上

(文字数：998字)

第36回

「外ではなく内にある」

先日、24歳の若者から「これからどんなキャリアを歩んでいけばいいか悩んでいます。國貞さんなら24歳の時の自分にどんなアドバイスをしますか？」と言われた。家に帰ってからそのことを考えた。そして、「やっぱりこれでいい」と思った。つまり、私の人生は失敗も多かったけれど、キャリアに対する考え方は「これでいい」と。この「これでいい」を、自分の子供達にアドバイスする気持ちで今回のコラムを書いてみたい。

1. 自分の人生は自分で決めたらいい。人の意見を素直に聞くことは大切だが、人がなんと言おうと最後は自分で決めればいいんだ。正しい人生の送り方などないのだから。
2. 常に自分で考え、自分の心の声に耳を傾け、自分の生きたい人生を生きてもらいたい。
3. 仕事は一生懸命したほうがいい。しこたま仕事をし、人一倍努力したほうがいい。目の前の仕事で成果を出せない人のキャリアが広がっていくはずはない。
4. 人生は自分の思いとおりにいくものではない。運命を受け入れる覚悟をするときも必要だ。好きなこと、やりたいことに拘りすぎるな。
5. 頭のなかであれやこれやと考えるより、先ず経験をすることが大切だ。ゴールなど決めようとせず、先ずは仕事の現場に立って自分を磨いていきなさい。

「キャリアをデザインしなさい」などと大人は言うが、そんな事は無視しておけばよい。人生はそんなに単純じゃない。つまらない目標など持つ必要もない。お金を求めればお金は逃げていく。自分だけの成功を求めても成功などしない。むしろお金のにおいが薄いところでやった仕事が、結果的に大きな成果につながる。自分のためではなく、だれかのために一生懸命やることが結果的に自分を幸せなところに連れていってくれるのだ。

キャリア・デザインとは、自分の体の外にあるキャリアの道筋をデザインすることではない。キャリア・デザインとは自分の内面を磨いていくことでしかない。仕事の成果も出せない、人間関係もうまく作れない人のキャリアが広がっていくことはないのだから。

そういう意味で、仕事は自分を磨く道具、仕事なんて何だっていいんだ。仕事はどれもくだらない。そのくだらない仕事をくだらないままにするか素晴らしいもの出来るのかは、その人の取り組みかたしだいなのだ。

みなさんが素敵な人になって、それぞれに自分らしいキャリアを歩むことを期待しながら今年も筆を擱きたいと思います。お元気で。

以上

(文字数：996字)